

絵本の読み聞かせについての一考察

曾 和 信 一

四條畷学園短期大学

A Consideration about the Reading a Picture Book to Children

Shin-ichi Sowa

Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要 第50号 別刷

平成29年12月25日

絵本の読み聞かせについての一考察

曾 和 信 一*

A Consideration about the Reading a Picture Book to Children

Shin-ichi Sowa

本稿では、最初に、子どもが成長する喜びと喪失する哀しみとの二律背反に生きることの意味について、児童文学を通して言及した。それに次いで、子どもにとっての絵本とその読み聞かせとは何かについて、保育者が絵本を選ぶ目を磨くことの大切さを踏まえて、絵本の選び方について論及した。そして、絵本の読み聞かせについては、丁寧な準備を行ったうえで、その読み聞かせの方法論の意味内容について考察したところである。

Key words: 耳からの読書、絵本の選び方、絵本の読み聞かせ方、想像力、絵本のもつ力

はじめに—成長の喜びと喪失の哀しみについて

『風によってきたメアリー・ポピンズ』の児童文学書の中で、「ジョンとバーバラの物語」が綴られている。¹⁾ ジョンとバーバラは双子である。まだ1歳になっていない二人は、二階の子ども部屋のベッドで寝かされていた。その双子は窓に差し込む日の光と対話ができる。バーバラは、優しく頬をなでるように動いていく日の光に、「あなたは、ほんとに、やさしくて、気持ちがいい！わたし、大好き」といって、暖かい光の中に両手を差しのべるのだった。日の光は「いい子だ」とバーバラの気持ちに答えるように言った。

そこに煙突のてっぺんに住んでいるムクドリがやってきた。その双子とおしゃべり仲間のムクドリは「ペチャクチャ、ペチャクチャ、またやってるね！こんな、おしゃべりのところはありゃしない。この部屋じゃ、いつも、だれかしら、しゃべってる」と言っている。それに対して、メアリー・ポピンズは「おまえさんは、いったい、どうなんだい？ 日がな一日—そうとも、それに、夜の夜なかまでも、屋根のうえやら電信柱やら。ほえたり、さげんだり、どなったり—のべつまくなしじゃな

いか。どんなスズメだって、まだましたよ。ほんとの話が。」と答える。このように、日の光もムクドリも、たとえ姿や形は違って、メアリー・ポピンズ、ジョンとバーバラと話を交わすことができた。

ジョンとバーバラのお話は続いていく。「ほくらのいうことは、ひとこともわからないんだもの。それはまだいいとして、もっとひどいのは、ほかの物のいうことが、わからないんだよ。ほら、ついこないだの月曜に、ジェインが、風のいうことばがわかるといいなって、いったじゃないか。」とジョンはバーバラに話しかけた。それに答えて、「おどろいたわ。そして、マイケルだって、いつもいってるじゃない—きいたことない？—ムクドリが<ピーチク>いってるって。ムクドリは、そんなこと、ちっともいいはしないし、わたしたちとおんなしことばで話してるっていうのが、わからないらしいわね。もちろん、おかあさまや、おとうさまにわかるとは思わないけど—あんなにいいかたなのに、なんにも知らないのね—だけど、ねえ、ジェインとマイケルぐらいいは、わかりそうなもの—」と言う。

ジェインとマイケルは、二人にとって年の離れた姉と兄である。「まえには、わかったんですよ」と、メアリー・ポピンズは二人の会話に入っていっ

* 四條畷学園短期大学 保育学科

た。「木のいうことや、日の光のことばや、そして、星や—もちろん、わかったんですよ！まえにはね。」と言う。「だって、—だって、どうしてみんな忘れちゃったの？」とジョンは考えた。メアリー・ポピンズは「大きくなったからです。」とその理由を言う。それに対して、ジョンは「ぼくは、大きくなったって忘れやしないよ」と返答した。「いえ、忘れます。」とメアリー・ポピンズは言い切る。ムクドリもその会話の中において、「忘れるってことは、どうにもならないんだよ。いままでだって、満で一つにもなって—せいぜいおそくってだが—まだおぼえてたって人間は、ひとりもいないんだから—もっとも、あのひとは別だけど。」と、メアリー・ポピンズを指して言う。

そんな話に不安になったジョンは、「ほんとに、なんなの、ぼくらも、もっと大きくなったら、あれがきこえなくなるの、メアリー・ポピンズ？」と尋ねた。「きこえることは、だいじょうぶ。「ただ、意味がわからなくなるんです。」と、メアリー・ポピンズが応えた。それを聴いて、バーバラは静かに泣きだし、ジョンは目に涙を浮かべた。「ぼくは、けっして、ほかの人のようにはならないよ。ほんとだとも。みんなは、」「いいたいことを、いえないよ！」と言い張った。「わたしだって。」と、バーバラは応えた。「けっして。」と。しかしながら、数ヶ月も経たず、ジョンとバーバラはムクドリと心を交わすことができなくなった。「泣いているのね？」とメアリー・ポピンズにからかわれながら、ムクドリもまた、涙ぐみながら二人のもとから飛び去っていった。

ジョンとバーバラが「おりこう」になり、歯がはえることを歡ぶおおかあさんと、二人と話ができなくなったことに涙ぐむムクドリとは、生きとし生きる生命あるものが生きる姿として表裏一体ではないだろうか。おとなは、かつて子どもの時代があり、自然とともに生きる生命あるものと交歓していたことを忘れ去って、平然としている。子どもの成長を無邪気に歡ぶおとなの姿こそ、問われてくるのである。つまり、成長する歡びとは、喪失する哀しみを伴うものだといえるだろう。敷衍して言えば、人が何かを得るといことは何かを失うということへの覚醒が必要だと考えることができる。逆接的にいえば、人は何か大切なもの

を失うことによってしか何か別の大切なものを得ることは困難なのだという自覚と認識が必要ではないだろうか。

子どもが成長するとは、子ども自身の内にある生きる力を自らが育てていくことであり、私たちはその成長の中に、“人間としての希望”を見出すことができるだろう。他方において、子どもが自らの成長の歡びとそれを見守るおとなの希望の発見の代わりとして、あまりにも失うものの大きさにその哀しみを嘯みしめ続けることにも、人が人として生きることの意味のひとつがあるのではないだろうか。

1. 絵本を選ぶ目を磨くに先立って

児童文学の「編集職人」である松居直氏は、絵本論について次のように指摘している。

絵本と幼児の関係を考える上で、“絵本は子どもに読ませる本ではなく、おとなが子どもに読んであげる本”だという認識に立つことです。²⁾

絵本を子どもに読む意味について、松居氏は、読み手と聴き手が“共に居る”ということにその意味を求めている。子どもは親をはじめとする身近なおとなと一緒にいることが大きな歡びであり、自分にとって大切な人の口から楽しい物語が語られれば、最高に幸せな気分に入るといふ。それは子どもが独りで絵本を読んでいるのとは較べものにならないほどに充実した体験だといふ。こうして誰かと共にいて、ゆたかな言葉に包まれ、人としての交わりのかげがえのない経験をしてこそ、温かくて豊かな心をもった人に育つと指摘する。

確かに読書は言葉を聴く力を身につけることから始まるものである。子どもが字を覚えたときこそ、おとなが本を読む絶好の機会だし、何よりも読み手が共にいてくれるという最高の幸せがそこにはある。幸せを一杯に経験した子どもは、きっと人を幸せにする言葉の使い手となると松居氏は指摘する。

おとなは絵本の中の言葉を読んでいるが、ただ読んでいるのではなくて、絵本の中の言葉にいのちの成長を育みつつある子どもへの愛おしさを込めての親心を添えて読んでいるのではないだろうか。そんな親の心の籠った言葉を耳から聴き、絵本の絵をその眼差しでじっと見つめて読んでいる

子どもは、絵本そのものをストンとその胸に納めるかのように、心の中で能動的に読んでいるといえる。

親子読書・文庫活動の実践を続ける山崎翠氏は、「育ちゆく子どもの魂のふるえ、おののきに触れる親のゆったりした感受性こそが、子どもの育つときの、わが子の心の栄養になるのではないかと思います。」³⁾と、親が育ちゆく子どもの魂に触れることの大切さについて言及している。

確かに、子どもが言葉を聴く力を身につけるとは、絵を読もうとする意欲に漲らせて聴きいることと密接に関わっている。そのいのちのリズムに感応する言葉とそれを聴く力を豊かに育てることと併せて、感受性が豊かで、何事に対しても意欲的に取り組んでいこうとする子どもに育てることこそ、読書好きで、温もりのある心をもった人間を育てることにつながってくるといえる。

ここで、保育と関わっての絵本について考えていくことにしよう。それには、保育者が絵とそれに載せた言葉を読んで好きになり、共感できるような絵本を選ぶことが大切になってくる。保育者が好きにならないし、その内容に感動したり共感したりできない絵本を、どんなに上手に読み聞かせをしても、子どもが楽しむことはできないものである。

だから、保育者が“いいお話だな”、“子どもにぜひ読み聞かせたいなあ”と思うような内容を伴う絵本であるとともに、子どもと感動を分かちあえるような絵本を選び、そこで感じ取った言葉を心に載せて子どもに語りたものである。保育者が自らの生き方と重ねて、その喜び、哀しみ、悔しさなどの様々な思いを絵本の中の言葉に託して語ることで、子どもは保育者の人格をまるごと感じ取ってくれるのではないだろうか。

2. 絵本の選び方について

そもそも絵本とはそこに書かれている字を読むのではなくて、絵を読むものである。子どもたち一人ひとりが読んでいる絵とは、美的センスが自ずから身につく意図をもって描かれたものである。そのことを子どもに寄り添っていえば、子どもは絵を見ているというよりも、絵に込められた作り手のメッセージを絵の中に読んでいるといえ

る。保育者が繰り返し読む絵本に乗せて語る心のこもった美しいリズムカルな言葉から、子どもはイメージを膨らませていくのである。

保育者の言葉を耳から聴き、絵を読んでいる子どもにとって、わかりやすく、面白くて、物語の運びにリズム感があり、リズムカルな言葉の繰り返しがある絵本を選ぶことが大切である。それとともに、絵が子どもにそのストーリーを語りかけてくれるような内容のものを選ぶことも重要だといえる。というのは、子どもは絵を通して、展開される物語とともに、その豊穡な言葉の世界に入っていくからである。絵について、保育者が見て、ほのぼのとした中にも暖かさを感じ取られるような絵がつけられているものが良いだろう。しかしながら、その絵がどれほど豊かにそのストーリーを表しているのかといったことがより大切になってくるのである。

だから、そのような文と絵とがバランスがとれ、しっくりと溶けあっていると同時に、絵がストーリーを語っているような絵本を選びたいものである。つまり、絵を見るだけでも、ストーリーの流れをしっかりと感じ取られたり、その内容が伝わってきたりするものや、話のわかりやすいものを選んでいきたいということである。それだけに、色合いよりも形が大切になってくるといえる。というのは、絵の中でストーリーを語る力の要素をより強く持っているのが形だからである。色合いは、形をより効果的にするとともに引き立てるものである。例えば、『もりのなか』『100まんびきのねこ』『はなのすきなうし』『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』といった古典的ともいえる絵本などは、色のないことが却ってストーリーを語ってくれ、読み取りやすくしているのである。

また、絵本を選ぶ時に、絵本それ自体の大きさも重要な要素になってくる。というのは、サイズの小さな絵本は保育者が多くの子どもの目の前の読み聞かせをするには不向きだからである。その意味で、ある程度の大きさがあり、少し離れたところからでもかなりの程度その絵の細部が見えるような絵本を選ぶことも大切なポイントになってくる。

思うに、すぐれた絵本とは何かについて、児童文学者の渡辺茂男氏は次のように述べている。

すぐれた絵本には、人間が人間であるために、

いちばん大事な情緒と想像力と知恵が、いちばん単純な、いちばんわかりやすい、いちばん使いやすい形でこめられています。絵と言葉の織りなす物語が、子どもの心に直接はたらきかけます。⁴⁾

渡辺氏の指摘を踏まえていうと、子どもが絵本の絵を読んだり保育者の言葉を耳から聴いたりしながら、抵抗感なくファンタジーの世界に入れ、夢を広げるとともに空想の翼をもって羽ばたくことができる絵本がすぐれたものであるといえる。

とは言うものの、読み手である保育者の基礎的な資質と主体的な力量によって、絵本それ自体がもっている価値が高まることもあれば低くなることもあるだろう。それだけに、その絵本の選び方について、想像力と創造力を豊かにするとともに、言葉も豊かになり、生活の様式としての文化というものを感じ取られるような絵本を選ぶ保育者の目を磨いていくことが大切になってくる。保育者の資質と力量を培っていくためには、保育者がより絵本を好きになり、絵本が繰り広げる世界を楽しむことが必要になってくるといえる。それとともに、絵本以外の書物についても幅広く読書をする習慣を身につけていきたいものである。

絵本の中で、春夏秋冬といった四季折々の季節感があり、その季節に見合った行事に関するものや、子どもの興味や関心のあるものを選ぶことも大切になってくる。そのように、保育者はその時季に見合せて、創意工夫をしながら絵本を選び与えることが大切になってくる。そうは言っても、子どもの年齢とその発達に即した課題に見合った内容や話の長さでないと、子どもたちは、絵本に興味や関心を示さず、嫌になったり集中して耳を傾けなくなったりしかねないので、そのことにも留意する必要がある。

絵本の選び方として、欧州の図書館では「親子三代読み継がれている本」がすぐれた本だといわれている。日本のそれでは「成人式を迎えた本」が良いとよくいわれる。そのことについて、渡辺氏は次のように言及している。

読みつがれてきたすぐれた子どもの本は、それぞれに、子どもの心に直接ひびく表現で人間について語り、さまざまな生活環境と人間関係のなかで子どもたちの育つさまを描いています。それだからこそ、このような本は、時代を越え

て読者の子どもたちを喜ばせ、読みつがれ、子どもの心を育ててきたのです。⁵⁾

子どもの心育てとしての絵本の最後のページにある「奥付」を見ると、出版社名などとあわせて、何年何月何日初版発行と必ず書かれている。それは、その絵本がはじめて世に出版された日付である。また、何刷り発行というのがあり、それは今まで何回繰り返して印刷されたのかということを表わしている。その回数が多いということは、その絵本が長い間にわたって、子どもたちをはじめとして、多くの人々に支持されてきたことを意味している。また、大抵の場合、そのような絵本はその時代の星霜に耐えた不易（時代を越えて変わらないもの）ともいえる“本物”である。その意味で、色々な絵本の中でも奥付の回数の多いものを選ぶことが大切になってくる。

自分で図書館や書店の店頭で自分の手にもって、絵を読んだだけで物語が自らの胸にストンと落ちるような絵本を選ぶことが重要である。しかしながら、大きな書店や絵本の専門店以外の書店では、人気のある売れ筋の絵本を中心に並べられており、その他の絵本はあまり多くは置いていないという傾向にある。そのような理由から、絵本がたくさん揃っている公共図書館や子どもの絵本や児童文学の専門店などで、いろんな絵本に出会い触れていきたいものである。

また、インターネットを活用して絵本の選び方を検索したり、本の一覧を参照にしたり、新聞などに紹介されている新刊の書評を参考にしたりすることも、絵本を選ぶひとつの方法であるといえる。とは言っても、インターネットで薦める絵本のリストの中には販売を主たる目的としたものがあるし、新刊の書評もどちらかといえば話題性などを重んじる傾向があり、必ずしも子どもに読み聞かせをしたいという絵本が紹介されているとは限らないといえる。

絵本の選び方について、結論的にいえば、耳で聴いて目に見えるように語られている絵本こそが、子どもに何ら抵抗感を持たずに想像の世界へと誘ってくれるといえる。“本物”の絵本を選ぶためには、子どもに寄り添い、子どもの目の高さで絵本の作り手のメッセージがどう伝わっているのかを感じ取ることが必要になってくる。それとともに、保育者（おとな）の目で作者が語ろうとして

いるものに共感できるかどうかということとを重ねあわせて絵本を選ぶことが大切であり、その選ぶ目をより磨いていきたいものである。

3. 絵本の読み聞かせとは

そもそも絵本の読み聞かせとは、保育者と子どもとの心の架け橋にあたるものである。言い換えると、絵本を仲立ちにして、読み手である保育者と読んでもらう子どもの心の通いあいにあたるコミュニケーションを大切にすることである。だから、まず保育者が文芸作品の様式上の種別、部門といえる多様なジャンルの読書を好きになり、そのことに触発されて、お話を好きになることが大切である。そして、絵本を読むことについては、一方的に読むというよりも、“子どもと心で接する”とともに“子どもと心を交わせる”という気持ちで読むと、子どもも作り手の心のこもった絵を目で感じて、しっかりと絵とその背後にある伝えたい思いのこもった言葉であるメッセージを読み取るといえる。

絵本の読み聞かせは、ある意味で、保育者が緩歩の心でもって、ゆったり、ゆっくりと子どもの“心田を耕す”礎を形づくるようなものである。読み聞かせの内容が時には難しくその理解がやや困難なものでも、子どもにとって保育者の絵本を読む声を心地よく聴いて、絵を読みながらその心が満たされることも少なくないといえる。その読み聞かせについて、保育者と子どもとが対一の場合もあれば、子どもが集団で絵本の絵を読んだり保育者のお話を聴いたりする場合もあり、そのどちらも大切なものだろう。というのは、絵本の読み聞かせによって、どちらの場合でも子どもたち一人ひとりが楽しんだり感動を分かちあったりすることができるからである。

そうして考えていくと、読み聞かせとは、乳幼児期の子どもにとって“耳からの読書”にあたるものといえるのかもわからない。そこでいう読書とは、単に書物を読むということではなくて、心の中に思い浮かべる像といえるイメージを膨らませるとともに、そのイメージを操作する想像力と創造力のなせる業に深く関わってくるものだとはいえる。保育者の心のこもった言葉を耳から聴くことで、子どもは文字が読めなくてもイメージを日々

の生活の中で蓄えていくことができるものである。絵本の場合、子どもが必要とするイメージを支えるとともに、深めながら広げてくれる絵の世界がある。その絵が繰り広げる世界を子どもの目で感じ取っているのだろう。

保育者は、作者が絵本に託した心を子どもに、その読み聞かせを通して、しっかりと伝えたいものである。作者のメッセージ性を伴った意図も考えながら、一言一句をおろそかにしないで、大切にして読んでいくことが必要である。というのは、子どもは耳から聴いて、能動的に見つめる目で感じて絵を読むのであり、保育者の言葉そのものを吸収し、イメージを豊かにしていくからである。

絵本を子どもに読むときは、その絵本を何回も読み込んで、内容はもとより作者の意図することをしっかりと把握することが大切である。というのは、読み聞かせは、慣れないと読むだけで精一杯になってしまい、その字面だけを読んでしまいかねないからである。保育者が絵本を読み込んで感じ取ったものを、子ども一人ひとりに感じ取ってほしい、知ってもらいたい、分かかってほしいこととは何かを十分に理解したうえで読み聞かせることが必要である。そうすると、子どもたちの様子やその場の雰囲気を感じる余裕も自ずからでくるといえる。

4. 絵本の読み聞かせに先立つ準備について

絵本の読み聞かせに先立って、まず準備をしたいこととして、お話が表紙の絵から始まり、裏表紙の絵まで続いている絵本もあり、汚れているところや破損しているところがないかどうかをチェックしたいものである。新しい絵本は折り目をつけて、開きやすくするといった工夫や配慮をするとよいのではないか。言い換えると、絵本がきれいに開かないと、絵が良く見えないし、読んでいても絵本が持ちにくいものである。

以前に読んだことのある絵本でも、読み聞かせをするに先立って、必ず目を通したり、実際に読んでみたりすることが必要だろう。というのは、読みにくい言葉などは、実際に声に出してみないとわからないからである。そうすることが“子どもたちへの礼儀”である。前に読んだことのある絵本だから、読んでみなくてもよいといった考え

方こそが“子どもたちへの礼儀”に反しているといえる。そのようにして、できるかぎり保育室などにおいてある本は、すべて一度は目を通しておきたいものである。絵本は子どもたちの成長・発達に大きな影響を与えるから、それくらいの心構えをもってちょうどよいのではないだろうか。

絵本の読み聞かせに先立つ注意点として、子どもたちの方を向いて絵本を見せているので、子どもたちの顔を見て反応をみるためには、絵本の内容を覚え、子どもに語りかけるようにしていきたいものである。その際の絵本の持ち方として、縦書き（右開き）の本は左手、横書き（左開き）の本は右手で持つのが基本だが、できるかぎり読み手の身体の前に絵本がくるように配慮しつつ、絵本が持ちやすい持ち方で良いのではないだろうか。その時に注意したいこととして、絵本がぐらつかないようにしっかりと持ちたいものである。というのは、本がぐらぐらしていると、子どもはお話に集中できないからである。また、支える指で絵を隠さないような配慮が必要である。片手で本の背の下側を持ち、親指のつけ根にもたせかけるようにし、開いたページを残りの4本の指で押えたと読みやすいだろう。絵と一緒に見える指に色の濃いマニキュアやネイルアートを施していると、絵を読んでいる子どもたちの集中力が欠けやすくなるので、それらは避けたほうがよいといえる。

保育者は子どもたち全体を十分に見わたせる位置、隊形などに心がけることが大切である。子どもの側に寄り添って言えば、絵本が見えないと、楽しさが半減してしまうものである。また、“後ろにも目をもつ保育”を心がけて、保育者の後ろには、できるかぎりものの少ないところを選ぶ方が、気持ちを落ち着けて絵本を見ることが出来る。そして、“子どもの目の高さでの保育”と関わって、絵本の高さと子どもたちの目の位置に配慮していくということが大切である。例えば、扇形や輪状に机を出して椅子に座っている時もあれば、床に座っている時もあるといったように、その時々に応じて保育者も自分のいる位置や絵本の高さを考えて読むといったことも重要になってくるのである。

本を持つ角度としては、まっすぐかやや前に傾けていく方がよいといえる。というのは、後ろに反らせて絵本を読むと、保育者の側からは読みやすいが、子どもたちにとって蛍光灯などの光が反

射して、絵本が見にくくなるからである。また、外の光りが強くて、陽射しが保育室に入ってくる時、カーテンなどを引いて、その光りを遮るといった配慮もしていきたいものである。それらのことと併せて、廊下の軋む音や騒音などを極力遮る環境づくりをしていきたいものである。そして、みんなが保育者の読み聞かせを静かに落ち着いて聴けるように、隣同士でお話をしないなど、最低限のルールを決めておくことも必要である。

絵本の読み方として、児童文学者の松岡享子氏は次のように言及している。

ふつうは、いきなり本文からはいらず、表紙をみせながら題をいったあと、見返し、タイトルページ（＝本扉。本の題名、著訳者名、出版社名などが書いてあるページ）と、順にめくって行って本文にはいります。本によっては、タイトルページの前後に、もう1ページ、本の題だけ、あるいは絵だけのページがあるものがあります。たとえば、『どろんこハリー』や、『三びきのやぎのがらがらどん』など。表紙から本文に至るこれらのページは、瀬田貞二先生のことばを借りれば、一軒の家の門から玄関に通じる道のようなもの。本によっては、なかなか凝ったたたずまいをもっているものがあります。⁶⁾

確かに、絵本は、表紙、見返し、タイトルページ、本文、裏表紙の全部でひとつの物語を形づくっている。松岡氏が指摘するように、保育者は、本文だけではなくて、表紙やタイトルページなども大切にして、絵本を子どもたちに見せたいものである。絵本の中には、表紙と裏表紙とが続きの絵になっていたり、物語をより一層広げていく効果があったりするものがあり、表紙と裏表紙をもって見せることがあってもよいだろう。その中でも、とりわけ、表紙のタイトルをきちんと読むことで、文字（書き言葉）に興味や関心のある子どもは、表紙の文字にも興味を示すといえる。また、中表紙の絵及びタイトルもきちんと見せたいものである。というのは、その絵が物語にとって重要な位置を占めている場合もあるからである。

これまで言及してきたことからわかるように、絵本は心をこめて読むことが大切である。絵本は子どもたちの心に語りかけ、豊かな感受性を育てていく大切な役割を担っている。だから、保育者が読み聞かせ以外のことに気持ちを奪われたり、

落ち着かなかつたりしたままに読むと、そのことが必ずといってよいほどに言葉に出てくるものである。読み聞かせをする技術を身につけることは大切だが、それ以上に子どもの心に語りかけるとともに、子どもの心の声に耳を傾けることがもっと大切だといえる。

5. 絵本の読み聞かせ方とは

ここで、絵本の読み聞かせ方について考えていくことにしよう。「いまから、絵本を読むよ」というすぐには読まずに、まず、絵本のタイトルを言ったり、表紙を見せたりして、「みんな、この絵本を知っているかな」「どんなお話かな」といったように、子どもたちの興味や関心を十分にひきつけてから、絵本を読みはじめたいものである。保育者が肩の力を抜いて、絵本の内容に興味をもつように導入していくと、ただ読むだけというのとは違って、子どもたちの聴く態度も自ずから変わってくるといえる。そうしてから読みはじめると、子どもたちも興味をもって見聞きすることができる。その導入がスムーズにいくと、読む側と聴く側の気持ちが一体となってくるのである。

絵本を読み聞かせる時、絵本をめくる早さについて、ゆったりとした中にも、メリハリをつけていきたいものである。また、保育者がアドリブで言葉をつけ足したり、読み飛ばしたりしないで、書かれている通りに読むことも必要である。絵本の読み聞かせの技術では、間のとり方がとりわけ大切である。読み聞かせのスピードについて、ゆっくりすぎると思うくらいの気持ちで心を込めて読むということである。というのは、気がつかないうちにどんどん早口になってしまいかねないからであり、ゆっくりと読むことに心がけたいものである。絵が物語っていることもあるから、文（言葉）が少なかつたり、なかつたりするページもゆっくり、ゆったりと子どもが絵を読めるように見せたいものである。そして、後ろの方で見ている子どもの心にも届くような声で、言葉を明瞭にして読むことである。

登場人物に応じて声に変化をつけて読むことについて、賛否が分かれるところである。登場人物に応じての声色によって、子どもの興味や関心を促すのと、その内容を理解するのに役立つという

考え方が一方にある。他方において、それによって、子どもたちが保育者の演出を楽しみにしてしまうので、淡々と読み聞かせをする方がよいといった考え方がある。そのどちらにも言い分があるが、保育者が大声や大げさな感情移入、声色、身振りなど、過剰な演出をしないで、その情景が描けるように、登場人物に応じて声の高低などで調子を変える時と場合があってもよいのではないだろうか。保育者が心を込めて読めば、自然と声そのものに表情がでてくるもので、意味のある言葉として子どもの心に届くものである。その意味で、場面ごとのメリハリに気をつけて読み聞かせをしていきたいものである。

絵本を読んだ後は、子ども一人ひとりがその余韻に浸ることを楽しめばよいだろう。それをゆっくりと味わいながら、「おもしろかった」「また、読もうね、今度は何にしようかな?」といったように、次に期待を持っていくように言葉かけしてもよいといえよう。しかしながら、必要以上に子どもに問いかけなくても、十分に子どもの心の中に響くものが残っていくのである。その意味で、子どもたちが物語の世界に入っている状態のままに少しの間だけ委ねておいて、色々感じるとともに考える時間を分かちもつことが大切である。だから、絵本によっては、「何がかいてあった」「〇〇がどうしたのかな?」といったような子どもへの問いかけは避けた方がよいのではないだろうか。また、むずかしい言葉づかいや絵本の内容に好ましくないような解説をつけ加えないことも肝要である。

保育者は絵本の読み聞かせのあとで、その日のうちに記録をつけることに心がけたいものである。なぜなら、次に絵本を選ぶときの参考になり、前回と同じ絵本を選んでしまうようなことも防ぐことができるからである。記録の内容としては、読み聞かせを行った日付、読んだ人、読んだ絵本、お話を聴いた人数、反応や感想などである。

ここまで言及してきたように、子どもたちは、“お話の世界”を通して、イメージをいっぱい広げ、ワクワクしたり、ドキドキしたり、ニコニコしたり、ハラハラしたりしながら、色々な思いを経験していくといえる。また、お話を聴く力を身につけ、ものを観察する力も育っていくだろう。そのように、絵本は、子どもたちのイメージや夢を広げる

とともに、子どもにとって身につけてほしい大切なものを心の中に確実に育んでくれるものである。それが子どもの心を育てるものとしての“絵本のもつ力”といえるのではないだろうか。それだけに、保育者も楽しみながら、心そのものが形となった手づくりの文化を子どもに与え続ける努力をすることで、絵本をはじめとする読書が好きになる習慣を身につけたいものである。

【注】

- 1) P.L.トラヴァース作、林要吉訳『風にのってきたメアリー・ポピンズ』岩波書店、1963年。
- 2) 松居直『わたしの絵本論』国土社、68頁、1981年。
- 3) 山崎翠『子育てに絵本を』エイデル研究所、27頁、1986年。
- 4) 渡辺茂男『心に緑の種をまく 絵本のたのしみ』新潮社、20頁、1997年。
- 5) 渡辺茂男『前出』21頁。
- 6) 松岡享子『えほんのせかい こどものせかい』日本エディタースクール出版部、116頁、1987年。

【参考文献】

- 1) 松居直『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部、2004年。
- 2) 山崎翠『続・子育てに絵本を―「いのち・ことば・へいわ」』エイデル研究所、1990年。
- 3) 瀬田貞二、渡辺茂男『絵本と読書』福音館書店、1976年。
- 4) 松岡享子『子どもと本』岩波新書、2015年。
- 5) 今江祥智『幸福の擁護』みすず書房、1996年。
- 6) 河合隼雄、松居直、柳田邦男『絵本の力』岩波書店、2001年。
- 7) 落合恵子『絵本屋の日曜日』岩波書店、2006年。

－ 2017. 9. 29 受稿、2017. 9. 30 受理 －

